

障害福祉分野における ICF 項目を用いたサービス評価の検討

ー3 層 D-Plus モデル評価マトリクスの枠組みからー

○ 立教大学 重田 史絵 (007279)

高橋 秀人 (国立保健医療科学院・008634)

キーワード 3 つ：福祉サービス評価・ドナベディアンモデル・国際生活機能分類 (ICF)

1. 研究目的

我が国の福祉施設のサービス評価においては、これまでストラクチャ評価、プロセス評価が中心でアウトカム評価がほとんど行われていないのが現状である。しかし、福祉サービスの評価において、提供した支援が利用者に効果をもたらしたかどうか、利用者のアウトカム（成果）に関する評価を欠くことは、評価として不十分であると考ええる。

なぜなら、福祉施設において支援を提供するソーシャルワーク専門職について、そのグローバル定義では、福祉の専門職は利用者のウェルビーイングを高めることを求めている。つまり、ソーシャルワーク専門職が働く福祉施設が最終的に到達すべき役割・目的は、支援によって利用者のウェルビーイングを高めることであると言えるからである。

このウェルビーイングを高めることについては、1998 年にノーベル経済学賞を受賞したアマルティア・センが、「ひとの福祉とはひとの機能の指標に他ならないと考えるのが最も適切である」¹⁾と述べ、福祉は機能で評価・測定するとしている。そして、「機能」を分類したものが「国際生活機能分類 (ICF)」(International Classification of Functioning, Disability and Health : WHO)²⁾である。

一方、評価の枠組みにおいては、医療等ヘルスケアの質の評価において、ストラクチャ（構造）、プロセス（過程）、アウトカム（成果・結果）の評価の枠組みを持つ、ドナベディアンモデルが最もポピュラーである。福祉サービスにおいても、ドナベディアンモデルに基づく評価の枠組みで検討していくことが適切と考える。

よって本研究では、福祉施設のサービス評価について、ドナベディアンの評価の枠組みに基づき、ICF の分類項目を用い、利用者のアウトカム評価を取り入れた評価体系の検討を行うことを目的とする。

2. 研究の視点および方法

本研究では、ドナベディアンの評価の枠組みを、さらにより広い福祉の領域において活用できるよう提案された³⁾「3 層 D-Plus モデル」の評価マトリクス⁴⁾を、評価の枠組みとして用いる。「3 層 D-Plus モデル」とは、マクロ（行政）、メゾ（施設）、ミクロ（個人）の 3 層構造を持ち、ドナベディアンモデルに「アウトプット」を加えたモデルである。ストラクチャは設備・人・組織、プロセスはどのように行う、アウトプットは事業結果、アウトカムは個人の行動変容を視点とする。今回は福祉施設の中でも障害福祉サービスを提供する施設を想定して、それぞれの枠組みにおいて評価すべき内容を検討した。検討された評価項目内容を、既存の評価指標で評価することが可能か照らし合わせることにより、

今後の障害福祉分野におけるサービス評価体系の知見を得た。

3. 倫理的配慮

本研究は、ヒトを対象とする研究に関わる各種指針には該当しない。本研究の全過程、成果の公表において『日本社会福祉学会研究倫理指針』を遵守して行う。共同研究者にも発表承諾を得ている。

4. 研究結果

3層 D-Plus モデルの評価マトリクスにおいて、ICF の分類項目での評価が適当と考えられた枠組みは、マクロ（行政）レベルではプロセスとアウトプットにおいて、「e.環境因子」の特に「e5.サービス・制度・政策」の項目であった。メゾ（施設）レベルもプロセスとアウトプットで、「e.環境因子」で特に「e3.支援と関係」の項目であった。ミクロ（個人）レベルでは、プロセスに「e4.態度」、アウトカムに「b.心身機能」の「b1.精神機能」や b2 から b8 の各障害に応じた機能項目、「d.活動・参加」の d1 から d9 のすべての項目であった。

これらの当てはまった ICF 分類項目を測定する既存の評価指標としては、マクロでは行政の事業評価、メゾでは福祉サービス第三者評価項目や支援実績などが、「e.環境因子」の項目の評価指標として考えられた。ミクロでは、「b1.精神機能」は障害支援区分を評価する行動障害関連 34 項目などが考えられた。「d.活動・参加」については WHODAS2.0 や EQ-5D の評価指標が考えられるが、これらの評価指標は実際ではほとんど使われていない。

5. 考察

3層 D-Plus モデル評価マトリクスの枠組みに当てはめることで、障害福祉施設のサービスについて、行政から利用者個人までを含めた障害福祉施設に関わる広い視点から、評価項目を整理することができた。ここから障害福祉 1 施設のサービスを評価する評価項目として、どのような具体的な文言としていくかが課題である。発表者のこれまでの研究で、支援時間が多い方が WHODAS2.0 の評価が高いという結果も出ており、WHODAS2.0 の詳細項目との結果の関連を分析することで、ミクロ（個人）のアウトカム評価項目の具体化も可能と考える。

本研究の検討方法の枠組みは、福祉分野全般に適用可能と考えられる。高齢、児童、困窮などのあらゆる分野において、各分野種別の状況に沿った検討を行うことにより、福祉の各分野種別の施設サービス評価の構築に応用可能であると考えられる。

[参考文献]

- 1) アマルティア セン(著)鈴木興太郎(翻訳)(1988)『福祉の経済学—財と潜在能力』岩波書店
- 2) 世界保健機関(WHO)(2002)『ICF 国際生活機能分類・国際障害分類改訂版』中央法規出版
- 3) 高橋秀人, 大冢賀政昭, 重田史絵(2021)「令和 2 年度厚生労働科学研究費政策科学総合研究事業 地域包括ケアシステムにおいて活用可能な国際生活機能分類 (ICF) による多領域にまたがる評価手法の確立に資する研究分担研究報告書」
- 4) 高橋秀人, 大冢賀政昭, 重田史絵「福祉領域における ICF を用いた評価の確立に関する研究」第 9 回厚生労働省 ICF シンポジウム, 2021.2.21. <http://icf-japan.mhlw.go.jp/poster01.html>